平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

北海道社会保険病院 放射線部 山口隆義

1. 参加した目的と達成度について

ここ数年での海外における学会発表を経験し，米国における臨床や基礎研究の現場に興味を持っていた．また，スタンフォード大学における最先端の研究内容に触れる事によって，今後新たに導入されるであろう医療技術を確認すると共に，自分自身の研究および学習の方向性を考える機会となる事を期待し，この研修に参加した．

研修自体は大変充実したプログラムで構成されており，スタンフォード大学を知る事から始まり，現状の臨床における画像診断から分子イメージングの今後までと，全てが魅力的な講義内容であった．また，病院内や 3D Laboratory に加え，画像診断に特化した Sherman Outpatient Center の見学もさせて頂き，講義だけではわからない現場の雰囲気も感じる事ができた．

2. アメリカの放射線診療の利点と問題点について

画像診断領域における実際の診療に関しては，日本と大きく変わる所はないと感じた．専門特化した技師の制度や，現場での配置はやや特徴的ではあったが，本邦でも大学病院などでは同様の傾向にあると思う．3D Laboratory が病院とは異なる建物内に設置され，独立した部門として成立している事については感心したが，個人的には撮影現場に隣接していないという不安も感じてしまった．また，短い見学時間ではあったが，CT や MRI の撮影および 3D 画像構築業務の流れに関しては，時間に追われている様な感じはなく，余裕のある検査枠で日常診療が行われている印象であった．ここには，本邦との医療制度の違いによる検査への考え方や適応等の違いが影響しているのかもしれない．

今回の研修では，中小規模の病院に関する現状を知る事はできなかったので，本邦において様々な状況で業務を行っている技師像との比較は難しいが，MR Research Technologist である Anne Marie Sawyer さんの「患者に一番近い所にいる technologist の役割は色々ある．」との発言は，research に関する講義が多い中，「For the patients」の心を感じる事ができ，我々と変わる所はないと実感した．

3. 今回の研修で得られた成果を今後どのように活かすか

分子イメージングに代表される最先端の lecture は大変刺激的であり，これからの医療の形を大きく変える可能性を感じた．実際に，我々がこれらの医療技術に関われるのはもっと先かと思われるが，その1つの方向性を知る事が出来たので，これからの自分自身の研究や学習に少しでも取り入れていきたいと考えている．また，改めて本邦における診療放射線技師の現状を考える良いきっかけにもなった．臨床と研究，専門性と汎用性など様々な問題があるが，これらの全てに関われる我々の現状には大きな可能性もあると感じた．今後も，この様な研修が継続される事を願っている．

Dr. Moseley と一緒に Lucas Center で Lunch time !!

最後に，広島大学病院の木口団長はじめ，研修遂行にご尽力下さった関係者の皆様に御礼申し上げます．有難う御座いました．